

---

# 龍の姫は凜と咲く

ゆうじん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

龍の姫は凜と咲く

### 【Nコード】

N1537C

### 【作者名】

ゆづじん

### 【あらすじ】

街で起こった不思議な事件。転校生の美少女。無関係だと思っていた二つを結ぶものとは？龍とは？作者は現代ファンタジー風味のつもりです。

## 前日（前書き）

感想お待ちしています。

## 前日

夜半、俺は自宅から数十メートル程にあるコンビニに出掛けた。夜食用のカップラーメンとお氣に入りの週刊誌を買う為だ。コンビニのレジ袋を片手に家までの帰途、裏山の奥に光るものを見た。裏山というのは小学校の裏にある小高い山のことで、確か山の中腹にはこの街の守り神の祠があった筈だ。さっきの光はその祠の辺りからだった。前から裏山は夜になると善からぬ輩の溜まり場になると聞いている。さっきの光は誰かが煙草でも吹かしているのだろうか。それとも……。何にせよ関わって得は無いだろう。俺はそう考え、やや小走りで残りの帰路を行くのだった。

裏山の祠が破壊されていたと俺が聞いたのは翌日の学校でのことだ。

## 転校初日

翌日の学校は二大ニュースで持切りだった。その一つは昨夜、裏山の祠が破壊されたらしいということ。実際に現場を見たのは一部の父兄だけだという。聞いた話によれば大層な壊されっぷりだったらしく、裏山の持ち主は「罰当たりだ!」とご立腹らしい。全て人伝に聞いたことなので確証は無い。

もう一つはこのクラスに転校生が来るということ。殆どの生徒にとってはこちらの方が重大だ。勿論、俺にとっても古びた祠よりも興味が湧く。

更に男子生徒を盛り上げる要因があった。それはその転校生、なかなかどうして美人らしい。これはクラスの勇士数名が職員室に偵察に赴き、小一時間説教をくらいつながらも手に入れた情報だ。だがその転校生、色々と都合があり午後の授業から参加するという。そのため、午前の授業は皆、どこか浮つきながらも比較的静かに過ぎていった。俺にとってもいつも通りに半日を過ごせて嬉しい限りだ。

昼食を終えて教室に戻るとそこは異様な雰囲気包まれていた。思わずここは本当に俺のクラスなのかと確認してしまった。間違いない。2-B。俺のクラスのような。だが何だ。この静寂は?

明るく、楽しくを地でいく我がクラスとは思えない。教室の扉を開けるとほぼ全員の視線が俺に集まった。一体、何だ? あまつさえ担任すらいるではないか。そして、クラス中の視線を集める俺に見向きもしない人間が担任と並んで立っている。どうやらこいつが例の転校生のようだ。

「神崎。お前今が何時だか分かってるか?」

担任に声を掛けられ転校生に向けていた視線を時計にむける。

「五限目が始まって15分つてとこです」

担任は一つため息を吐いてから、「早く席に着け」と促した。俺

は教室に入る前に駄目押しで、

「俺の休み時間は15分程度長く取るようにして下さい」

と生意気を言ってみたが、担任はそれ以上何も言わなかった。

自分の席に向かう途中、それとなく転校生に目を向けた。転校生はやや中空をぼんやりと見つめ、口を真一文字にきつく閉ざしている。確かに可愛らしい顔つきだが、その表情が少しばかり損ねている気がしてならない。緊張しているのかと思ったら違うらしい。すらすらと流れるように自己紹介をしてみた。

かんばやしたつき  
「神林竜姫です。上西高校から来ました。どうぞ宜しくお願いします」

見た目通りの澄んだ、それでいて凜とした声だった。担任から彼女に関する簡単な説明を幾つかしたのち、五限目のHRを「彼女がクラスと親睦を深められるように」と自習にすることを告げた。

「それじゃあ、神林の席は女子6番だから……男子6番、神崎の隣な。……神崎、変なことを教えるんじゃないぞ」

変なことってなんだ？ 担任の頭の中で俺は一体どんな肩書きがあるんだか。

面倒くさくなったので短く、「はい」と答えて後は机に突っ伏した。短い間だが隣だった木下が「じゃあね」と呟いたのも聞こえないフリをした。新しく隣の席に座った神林は相変わらずの無愛想で「宜しく」と言っと、後はひたすら周りの相手をしていた。そんなこんなで五限目が終わると俺は疲れたので早退することにした。

家に着いた俺は着替えもそこそこに眠りに就いた。転校生が隣の席なのだから明日から確実に騒がしくなる。それは勿論、神林に向けてられた興味であり、俺に対するものは一切含まれていない。それでもやはり、近くでがやがや騒がれるのは迷惑だ。安眠妨害だ。よって家でくらはゆつくりと寝かせてもらおう。

その結果、俺は夜半目を覚ますというなんとも中途半端な状態になってしまった。どうしようか。暇つぶしにテレビを点けるが深夜の天気予報に興味は無い。

あまり当たらないし。

なんとなしにカーテンの向こう、窓の外を眺める。ぼつぼつとモザイク状に街灯が街を照らしている。この街には光害の影響はなく、いつも晴れれば満天の星空だ。そして、どうやら今日は新月らしく月は無。その方が却って星が綺麗に見える。いや、別に俺はそこまでロマンチックな趣味は無いが。そういえば、部屋の窓からは件の裏山も臨める。あそこの祠、壊されたんだよな！。と思ってからそこに到るまで一時間も掛からなかった。

問題の祠は何を祀っているのかは知らないが小さな頃はよくお詣りにきていた。しかし、何故だろう。いつの間にか近付かなくなつた。子ども心に何かあつたのか？ 祠の周りにはよくドラマでみるような黄色いテープに『keep out』の文字。あまりにベタな光景と無残な瓦礫と化した祠との対比がシュールだった。

「警察沙汰ってことはやっぱり器物破損になるんだな。昨日のあれって犯人なのか？」

そんなことを呟く。周りに人は居ない。梟の鳴き声が無性に寂しくさせた。

「……帰るか」

俺は壊れた祠という事実だけ確認して帰ることにした。コンビニ

でも寄ってカップヌードルでも買って帰ろうか。そう考えながらの帰り道。裏山の遊歩道もどきの半ば程で、俺は意外な奴を見つけた。長く艶やかな黒髪。夜闇に朧気に浮かぶ白磁の肌。毅然とした立ち姿に真一文字の口。そう、転校生神林竜姫だ。女の子がこんな時間に何やってんだ？ とは思うものの声は掛けられない。別に俺がシャイだからとかじゃなく、神林の異様な気配に圧倒されたからだ。あれは何だ？ 神林は背中に軽く背負うようにして何か細長いものを持っていた。それはこの夜闇の中、確かな存在感を有している。俺は自分の脈拍で鼓膜が破裂しそうだった。何でこんなにも心臓が脈打つのかは分からない。ただ神林から目を反らせずにいた。

神林は俺に気付く様子もなく、山道を登る。

ゆっくりと、しかし確実に。その先には祠くらいしかない筈。神林も祠を見物に来たのか？ いつもならどうでもいいことなのに、俺は遊歩道を駆け上がった。祠に向かつて。神林はゆっくりと歩いていて、全然追いつける気がしない。息が上がってきた。何でこんなに必死になってんだよ？ 分からない。ただ、耳鳴りが煩くて仕方なかった。

イマナラマダマニアウ ヒキカエセ ……と。



俺ってこんな奴だったけな。

自問自答に耽るも、息絶え絶え。

情けない。俺が必死こいて辿り着いた祠跡に神林の姿は無かった。

ここが目的じゃないならどこにいるのか。そっちの方が気になったりする。しかし、さっきのは何だったんだ。神林が背負ってたのは何だ？ 祠跡近くの石に腰掛けた。無駄足だっただけにやたら悔

しい。出来れば何なのか知りたかった。もしかしたら、神林はこの事件と何か関係があったりして。それなら面倒だ。噂をすればナントやら。脇の藪からひよっこり神林登場。辺りを見回し俺に気付いた様子。俺を見て少し悩んでいるみたいだ。「隣の席の」と小さく聞こえる。神林はどうやら物覚えがいいようだ。完璧ではないものの、目立たない俺のことを覚えていた。

「神崎」

俺が呟く。

「神崎」

俺を指差し呟く。

「呼び捨てかよ」

「……神崎くん」

相変わらずの無愛想。少し揺すりをかけてみたが動揺する素振りもない。読めない奴だ。

「神崎くん、何してるの？」

藪から体を半分だけ出した神林。早く出てくればいいのと思う。  
「神林さんこそ」

背負っているものからはさっきの嫌な感じはしない。

「私は、秘密」

神林はそれだけ言って藪の中に戻っていった。それから暫くは会話も無く、梟の鳴き声を二人で聞いていた。

「帰らないの？」

藪の中から神林が呟く。

「暫くは」

俺も何となく呟く。今はもう結構いい時間だろう。出来れば早く帰りたいが、自分の中の僅かな好奇心に従うことにした。何かが起こる気がするのだ。

その直後、祠から光が溢れた。それは泉に湧いた水のように鮮やかなものだが、あまり見ていて気持ちのいいものじゃない。

「何だこれ？」

俺は啞然として声を零した。その光は点灯を繰り返している。光が強くなるとその度に金属の擦れるような音が辺りに響く。

「やっ」と出て来た」

神林の言葉を合図に何かが祠から飛び出した。

金属の擦れた音とざらついた低い音が不協和音を奏でる。光は音に合わせて屈折を繰り返し、徐々に形を成していく。やがて光が薄れてその姿を明らかにする。そいつは赤黒い染みを体中に持つ不気味な程巨大な蛇だった。俺より一回りでかい。そいつは俺に見向きもせず、ある一点、藪を見つめる。そこは確か神林が居るところ。

「許スマジ……」

その大蛇はざらつく声を響かせた。

「許スマジ……！」

最初の声とは違い、怒気を孕んだ唸り。大蛇の唸りに大気が震える。この祠一帯が声帯の役割を果たしているかのように感じる。大蛇は藪からゆっくりとした動作で出てきた神林を尚も睨み付ける。

「やっぱり、まだ生きてた」

神林は溜め息一つ吐くと、面倒くさそうに背中何かに手を掛けた。それは長い竿状のもので布が巻かれている。

「二度ト遅レハトルマイゾ」

大蛇は体をうねらせた。大蛇の体中の染みから闇より濃い黒色の霧が吹き出す。

「そんな体で？」

口は真一文字の神林が挑発の言葉を口にするより馬鹿にされた気がするのだろう。

大蛇は唸り声を上げて鎌首を上げる。周囲の木々が太さに関わらず全てが若竹のように容易くしなつた。簡単な動作だが、無駄に迫力がある。異常な光景の中心で凜と佇む神林。それを眺める俺はさも場違いに思えるが、情けないことに腰が抜けて動けない。というか、これは何の特撮だ？ 軽く放心している。

「早く死んでよ」

神林は背中ものを正面に構える。巻き布を払うと出てきたそれは素人目に見ても立派な日本刀であった。美少女が日本刀を構える姿はなんとも不自然で非現実的な風景をさらに深めてくれた。

#### 4（前書き）

感想を聞かせていただければ幸いです。

神林は鞘から一息で刀を抜いた。鞘を左手に持ち、右手は切っ先を地面に向け、力無く刀を握っている。隙だらけな構えだが、慣れているのか一連の動作は様になっている。下げられた刀身は淡い藍色の光を帯びている。それはさっきの光とは違って、清らかで神々しい光だ。夜陰の山中では一際目立つそれを握り締めた少女は相変わらず真一文字で、どこか滑稽に思える。神林はゆっくりと大蛇へと近付く。でも何でこいつは一々動作がゆっくりなんだ？ 下らないことを考えていると、大蛇と神林の戦闘が始まった。先手を切ったのは大蛇の方だった。大口を開けて神林に喰らい付こうと首を振り下ろす。迎えて神林は右手の刀を正面に持ち、鞘を交差させて十字に構える。大蛇の口から長い無数の牙が喰らい付かんとするが、

大蛇から噴き出す黒い霧と、神林の刀が発する光が互いに退けあう。両者が直接触れ合っているわけではないのに、激しくぶつかる衝撃と轟音が生じる。しかしそれでも、大蛇の力は神林に影響を与えているようだ。神林の立つ地面が一気に陥没する。見るからに凄い衝撃なのに当の神林は涼しい顔で佇む。物理法則に従えば、あの華奢な足などへし折れてしまはずだ。それでも彼女は立っている。相変わらずの真一文字で。数秒間続いた拮抗を破ったのは神林だった。神林は刀を自分の右下に引く。大蛇は突如支えを失い前のめりになった。去なされた大蛇の巨大はそのまま前方に進んでいく。すかさず神林はその脇に入る。刀を片手でバトンのように反転させ、逆手に持ったそれを下から一気に切り上げた。大蛇自信の勢いを利用した素晴らしい攻撃だ。始めは神林の刀を弾いていた大蛇の鱗は許容範囲を越えた斬撃に、鈍い音をたてて斬り裂かれていく。

「ヴアアアアアアアアアツ！！！」

苦痛からでる叫びなのか、大気を震わせる怒声を上げながら林に頭から突っ込む大蛇。斬り口からは赤黒い霧が噴き出す。その様子を

静かに見つめる神林は、正直……滅茶苦茶怖い。大蛇が勢いを失い最期の呻きを終わると、神林はやはり無表情で刀を鞘に納めた。光が少しずつ消えて、夜の帳が戻ってくる。白磁の肌には返り血すら無い。

「神崎くん」

急に声を掛けられたが、上手く声が出ない。あまりにもショックが大きい。まさか、生の怪物ショーを見るとは思ってもみなかった。

「大丈夫？」

大丈夫ってどこが？ 頭なら少し危ないかも知れない。

「い……い……いまのは？」

震えた声で搾り出した言葉があまりにも情けない。自嘲とはこういうもんなんだろう。

「さあ……」

神林はあつさりと意味不明なことを言った。今、目の前で化け物相手に格闘してた奴のセリフじゃない。

「さあ……って。今化け物と戦ってただろ？ 刀とか振り回して

……」

相変わらず腰が立たないが何とか声は出た。

「……」

無言で俺を見つめる。『何を言っているか理解できない』と目で語っていた。

「……夢でも見てたんじゃない？」

とか涼しい顔で言う。え？ 夢？ 夢ならそりゃいいんだが……

…。

「早く帰ったら……」

「危ない！」

気付いた時には遅かった。赤黒い気体を纏った大蛇の 文字通り毒牙が神林を襲った。神林は抜群の反射神経で体を擦らせてかわす。くっ……」

だが僅かに右肩を掠めたようだ。神林は肩を抱いてうずくまった。

白磁を伝う鮮血。紅と白のコントラストが更に現実味を増す。

「何だよ……これ」

緩やかに起き上がる死んだ筈の大蛇。

「「許スマジ……」」

大気を震わすざらつく声で怒りを露わにする。心なしが軀も大きくなっていないか？

鎌首を上げる大蛇。その眼は間違いなく俺たち二人に向けられている。「おい！ 大丈夫か？」

聞くまでもないことだが、俺には他にかけ言葉が無い。

死にたくない。その思いだけで無我夢中になった結果、気付けば俺は神林を担いで裏山を駆け降りていた。

山道を走る。

これでもかっつくくらいに走る。今晚はよく走るな。肩に担がれた神林は時折痛みにも声を漏らしている。出血が止まらない。神林の着ている白いブラウスがみるみるうちに紅く染まっていく。どこか大きな血管でも傷つけたのか？

「取り敢えず、病院行くぞ。しっかりしろよ」

「……」

神林はか細い声で呟いたが、荒い呼吸音で聞き取れない。

「何だ？」

「……病院、は、いや」

「いやって言ったって……」

「……お願い」

不覚にもドキツとした。

「仕方ねえ」

俺は病院とは違う方向に進路をとる。

こんな時に頼りになる人は一人しかいない。俺は数少ない知り合いの目を目指した。慣れた道でも夜だと少し戸惑う。

「神林、大丈夫か？」

声をかけてみるが返事はない。これは危ないのではないか？ ス

ピードを上げようにも体力的に無理だ。足がもつれて転びそうになるが、なんとか持ち直す。もう少し、次の角を曲がればすぐそこだ。

「もうすぐだから……」

角を曲がる。十五メートルほど先に目当ての家が見えた。



「それで、何があったんだ？　こんな夜中に血だらけの女の子を担いで来るなんて。まさか、お前……とうとう手を染めたのか？」  
「何に？」

今、俺の目の前に居る男はかぶらぎみおと鏑木滂斗。俺の従兄弟であり、俺の居候先の主だ。つまり俺は神林を自分の家に運んできたのだ。今、神林は処置を受けて眠っている。

「それで、傷の具合は？」

「傷は深くなかったからな。止血をしとけばあとは大人しく寝てればいい。全く、お前は慌てすぎだ。」

「いや、普通慌てるだろ」

鏑木は鼻でふんつと笑うといつも通りの不機嫌そうな顔で睨んでいた。

「平和ボケしすぎだ」

そう言われたら返す言葉が無い。鏑木はそんな俺の様子を見て再び鼻を鳴らした。

「まあいい。取り敢えずこれは自分でなんとかしろ」

鏑木は神林のブラウスを投げつけてきた。大部分に血が染みてしまっている。

「いや、俺に渡されても……ていうか、神林は今何着てんだ？」

「裸だ」

「おい！」

慌てる俺に対し、鏑木はつまらなそうにしている。

「冗談だ。適当に服を貸してある」

こいつも冗談を言うのか。いつも不機嫌な顔をしているくせに。

「俺は疲れた。全く、こんな時間に怪我人の止血をするとは思わなかったからな」

鏑木は愚痴を零しながら、自室へ戻る。

「本当に助かったよ」

俺はその背中に声をかけた。

「厄介事はもう勘弁だ」

楠木は振り向きもしなかった。不器用な奴だ。

さて、俺も寝るとしよう。今晚は色々と疲れた。

翌日の朝、神林の姿は家のどこを探しても見当たらなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1537c/>

---

龍の姫は凜と咲く

2010年10月11日17時58分発行